



立教大学

社会福祉ニュース

第20号 1999年3月31日発行 編集発行人 佐藤悦子 東京都豊島区西池袋3 立教大学社会福祉研究所

惜別…佐藤悦子所長の退任にあたって

副所長 庄 司 洋 子

佐藤先生の最終講義の余韻がまだ胸のうちに響いている。先生がこの福祉研の所長であることを心底から誇りに思えるような充実した講義であった。また、参加者の多くが、そのお姿からみて定年とは到底思えない、という感想をもらしていた。それだけに、先生をお送りする惜別の一文を書くことは、私にとって正直なところ大きな苦痛である。

佐藤先生が所長に就任されたのは1988年、私が福祉研の仲間に加えていただいたのは1990年からである。この時期、福祉研は今にして思えば大きな曲がり角にあったといえる。佐藤先生は、早坂先生から所長を引き継がれ、学内の専任教員としてただ一人で福祉研を背負っておられたが、学外の非常勤所員に支えられている福祉研が、大学による認知度という点ではいま1つ不十分であることを、検討課題にせざるをえなくなっていた。そういうところに私が縁あって先生と同じ社会学部に着任したので、先生は、私を相談相手としながら、福祉研を新しい方向に導くための舵取りを積極的に始められたのである。キャンパス改造計画のなかで場所が15号館に移転したのを機会に、大学の予算で必要な備品を購入してもらえるようになったことも、研究所を研究所らしくするための大きな一歩だったと思う。さらに、卒業生の篤志家からの定期的な寄付が研究所にいただけるというありがたい状況が生まれたために、研究所としての条件整備に弾みがついた。

組織面では、所長を除く全員がいわゆる学外所員という変則を脱するために、学内に広く声をかけはじめ、やがて、ほとんどの学部から専任の教員が所員として活動にかかわるような体制をつくることができた。また、活動面では、長く続けられてきた公開セミナー「親子関係の病理」に次ぐ

「家族の生態学」や1泊2日スタイルの合宿セミナーに一区切りをつけ、あらたに「連続講座・社会福祉のフロンティア」「家族療法セミナー」を発足させる一方で、豊島区教育委員会や豊島区男女平等推進センター(エポック10)との連携をはかるなどの展開がみられた。この間に、研究所に対する委託研究を受けたり、さきの寄付金を財源とする研究助成を行うなどして、所員や研究員によるいくつかの研究プロジェクトが成立し、歴史ある研究所にさらに新しい研究活動の拠点という性格が加わった。また、学外の所員・研究員にも研究発表や自己研鑽の場を提供することを目的として、若手研究員を中心とする研究例会も定着している。

そうした多様な活動の展開のなかでも、とりわけ、佐藤所長が直接の担当者として企画や講師を引き受けてこられた専門家向けの「家族援助技術セミナー」は、「対人援助技術セミナー」と並んで、研究所の顔にあたる活動として知られており、佐藤所長はまさにその研究所の目玉となる存在として社会に向けて個性あるメッセージを送り続けてくださった。そのことにより、研究所は大きく社会化を遂げてきたといえよう。幸いにも、佐藤先生は、ご退任後もしばらくのあいだは研究所の活動に協力してくださるとのことであるが、私たちは、多少の時間をかけながらポスト佐藤の新体制のありかたを探らなければならなくなっている。先生が余人をもって代え難い存在である以上、研究所はかなりの転換を余儀なくされるであろうし、それをすすめる勇気をもつことが、精神的に研究所の発展のために働いてくださった佐藤先生へのご恩返しになるものと信じている。言葉にならない思いを込めて、もう一度、佐藤先生ありがとう、新天地でのさらなるご活躍を祈りつつ。

1998年度の社会福祉研究所の活動

○公開講演会・社会福祉のフロンティア

第16回 「家庭教育を問い直す」

1998年6月26日

於：立教大学7号館

講師 中央大学教授 中野 光氏

1998年7月18日

「日本におけるドメスティック・バイオレンスの現状と課題」

研究員：原田恵理子

1998年10月3日

「育児教育の視座」

研究員：米原 立将

第17回 「現代の高齢者虐待

—アメリカは高齢者の虐待に

どう取り組んでいるか—」

1998年12月18日

於：立教大学太刀川記念館

講師 淑徳大学教授 多々良紀夫氏

○社会福祉研究所共同研究プロジェクト

「保健・医療システムにおける心理・社会的援助について—自己決定から考える—」

所 員：佐藤 悦子

所 員：岩本 操

研究員：金子 達郎

研究員：井上 朋子

○家族援助技術セミナー

第7回 「家族面接の技法」

1998年7月4日

於：立教大学7号館

講師 東京大学教授 亀口 憲治氏

○相談援助活動

社会福祉研究所の家族福祉相談室では、研究所のスタッフを中心に、それぞれの分野の専門家が家族心理相談・福祉相談を行っています。相談内容は下記の通りで、ご予約いただければどなたでもご利用になれます。

◇家族関係、対人関係にかかわる問題

夫婦関係、親子関係での悩み、職場での対人関係上のストレスなど。

◇子どもの発達・療育、教育にかかわる問題

育児・しつけの不安や、発達上の心配、不登校など。

◇高齢者にかかわる問題

高齢者の生き方、老親介護上の悩みなど。

◇その他

問題によって適切な相談機関をご紹介します。

○対人援助技術セミナー

第4回 「カウンセリングマインドの

体験レッスン—Part 2—」

1998年12月19日

講師 立教大学教授 福山 清蔵氏

○定例研究発表会

1998年4月18日

「保健所における精神保健相談の状況と家族援助の実際」

研究員：石川さとみ

「家族援助における親の会の役割—歴史的変化に応じた援助システムの展望—」

研究員：嶋崎理佐子

佐藤悦子先生を送る言葉

佐藤悦子先生の立教大学定年御退職と社会福祉研究所所長御退任にありた、長年先生の後輩として、また研究所所員としてお付き合いをさせていただいた者として、一言その贈る言葉を述べさせていただきますと思います。

佐藤先生は私にとって、大学の同窓の先輩であり、ともにその学生時代、早坂泰次郎先生（現在立教大学名誉教授）の下で学んだ、同門の大先輩という存在であります。私が学生時代は、佐藤先生は既に米国で精神療法、家族療法の実践的研究者として御活躍中であり、時折帰国された際にお会いするだけでした。しかし当時、早坂研究室でも、また社会福祉研究所（前所長は早坂先生）でも、しばしば佐藤先生の名前とその存在、そしてその御活躍はしばしば話題に上っておりました。そうした中で、私は後輩としていつか是非、佐藤

専門分野の一部が少年法であることから、佐藤悦子所長の下で、私も立教大学社会福祉研究所の学内所員とさせていただいた。施設で言えば、児童相談所・児童自立支援施設・児童養護施設あたりまでは私の視野にも入っている。しかし、いわゆる福祉を専門とする学内所員の先生方や研究員の方々のお話を伺っていて、また、児童福祉施設のあり方について、東京児相研で児童福祉司達とアレコレ議論していて、法学を背景としている私と福祉の方々との間で、自由権の保障と社会権の保障とのいずれを重視するかによるのであろう問題関心が、少しズレていると感じ続けてきた。

子どもがその中で生まれ育つ基本的な環境である家族・家庭のあり方は、少年の健全育成に役立つ要因としても、非行少年や不良行為少年を生み出す要因としても、その比重が極めて大きい。佐藤先生のご専門である「家族臨床」も、この意味

所員 足立 叡

先生と一緒に仕事ができれば、と思っておりました。それが、先生が米国から日本にその活躍の場を移され、立教大学に赴任されることになり、期せずして、共に当社会福祉研究所の所員として今日まで一緒に仕事をさせていただくことができたのです。

そして今日までの間、研究所のセミナーや、佐藤ゼミの学生の皆さんとの交流、また拙書の書評（「社会福祉研究」第68号所載）をお願いし、厳しくも、しかし心のこもった御指導を戴いたこと等、また、いつも気さくに「足立さん、元気？」とお会いするたびにお声を掛けていただいたこと、まことに忘れがたい思い出一杯であります。

どうか今後、米国にお帰りになっても、いまままで変わらず、お元気で御活躍くださることを心より祈念しております。

所員 荒木 伸 怡

での非行防止や不良行為防止を目的に含んでいる筈だと思いつつ、どこがどのように影響するのか、介入の限界はどこかなどを、私は未だ具体的に理解できないままである。それにもかかわらず、私の研究を指導して下さるべき佐藤先生が退職してしまわれるのは、誠に残念である。

私はこれからもときおり、いわゆる少年問題についてや、自由権保障の必要性・重要性について、発言し続けるつもりである。こんな学内所員の存在が多少とも影響を与えて、やがて学生・院生などの中から、自由権の保障と社会権の保障とを統合した調査研究を行う者が生まれるかも知れない。佐藤先生の退職後の社福研は、あせらずのんびりとその時を待つこととなるであろう。例えば、家事審判所と少年審判所とが統合され家庭裁判所とされて既に50年も経っているのに、家事部と少年部とが有機的に関連し連携プレーをしているという話しが未だに聞こえてこないのだから。

佐藤悦子先生を送る言葉

佐藤先生、お疲れさまでした。先生が所長をされたこの10年間で社会福祉研究所は全学的にも対外的にも大きく発展し、福祉研の歴史における第二期を画したように思います。セミナーや公開講演会はしっかりと定着してきましたし、研究例会も軌道にのってきました。また、所員や研究員の構成もぐっと拡がり、厚みが増し、事務体制も充実した安定した組織になりました。とりわけ、若い人達の参加が多くなり、研究例会や紀要などを通じて活発な研究活動がみられるようになったことを嬉しく思っています。

先生とのお付き合いは私が立教に勤務したときからですのでわずか6年間ですが、先生の大らかな人柄と、ここぞというときの明快な決断、それにすてきな歌声(これは入学式や卒業式の壇上で

私は登校拒否・不登校の子供や家族への支援をし、教育者たちにかかわる実践家です。大学の研究所にはあまり似つかわしい存在ではありません。それにもかかわらず、佐藤悦子先生は早坂泰次郎先生と同様に私にかかわって下さいました。

もともと獣医師の私は「理論抜き臨床」と言う即効的で現実的な治療論を教えられた関係で、心理や社会福祉やコミュニケーションに関しても理論抜き…の実存的な態度を通しています。その理論抜き家の私をある所員は「一人くらい普通のおじさんがいても良い」と言う暖かい励ましで、今日まで所員の籍だけは残してきました。

佐藤悦子先生はそのような私が主催している登校拒否・不登校児の親や、各種の研修会で講師を引き受けて下さいました。私が実践している子供の生活体験の場(山梨県)にまでおいで下さいました。佐藤悦子先生の豊かな学識のみならず、エネルギーな行動力に敬服してきました。

所員 木下 康 仁

聞きほれていました)などが印象に残っています。

定年退職というと人が制度に型はめされたように思えますが、retirementと置き換えればむしろ個人のライフコース上の転機としてさまざまな人生戦略が描けます。太平洋をはさんだ行き来がこれからの先生の生活のアクセントになるのではないかと想像しますが、研究的にもご専門領域において日本とアメリカの文化差を織り込んだ先生独自の理論が生成されるような予感があります。

どうぞお元気で。

所員 高 橋 良 臣

私自身は、最近、仕事を増やしすぎて大学に顔を出す機会がめっきり減ってしまい、幽霊所員となっています。佐藤悦子先生とは大学の研究所でお会いする機会はほとんど無くなり、学会や講演会や研修会でお会いするだけとなってしまいました。それにもかかわらず、家族の祝儀にご参列下さいました。本当にありがとうございました。

世間的に見たら牧師が取るべき態度ではないと非難されるような行動を私が取った時にも「良かったじゃない」と言って暖かく慰め励まして下さいました。佐藤悦子先生の心の深さを感じました。

「登校拒否の高橋です」と言って電話を掛けると爆笑して、講師なども引き受けて下さる佐藤悦子先生初め所員の先生方がいらっしゃる限り、人間とのかかわりが好きな私を登校拒否状態のまま所員でいさせて下さい。

佐藤悦子先生、ありがとうございました。

佐藤悦子先生を送る言葉

30年間も所員をやり、非常勤講師をやっていたりしていた立教大学の定年を知らなかったのは不覚であった。“佐藤先生がこの3月で退職云々”という原稿依頼がきたとき“まさか今時 55歳で定年？”一瞬驚いた。仲間が70代、80代で私学に勤務しているからである。30年間に所長が3人……

最初は岩井先生→若輩の小生の意見を静かに傾聴してくださり、ポツリと感想を述べるチャプレン。沢山の刺激を下さり、当時まだ外国へ誰でも行ける頃ではなかった1970年ヨーロッパ等8ヶ国の施設見学に行くキッカケとなった忘れ得ぬ人だった。

次は早坂先生→いつも酒があった記憶。所員会でも、合宿や研修旅行でも。そして所員の顔ぶれもがらり変わりこれは時の流れのせいかな研究所の諸雰囲気のせいかな。

そして佐藤先生→“10年にわたり所長を務められた”と記してあったが、小生もこの10年間は職

さっそうと立教に戻ってこられた先生は大きな帽子（紺？）をかぶってスッスッと歩いていました。そのことを時折思い出します。以来小生も所員の一端に加えていただいて、セミナーその他で先生と触れる機会がもてました。

後半は学生部長職を兼務しながら社福研所長を意欲的にこなしておられました。

飾らない人柄と臨床家としてのしなやかさが先生の味わいです。「そうねー」と困ったり、「本当に頭にくるわね」と怒りを表明したりするのですが、でも、いつもどこか一歩離れて状況を見ている所があり、たま、案外平気で人に何かをポンと任せてしまう太っ腹というか、したたかさを持ち合わせていました。いつでもクールなたたずま

所員 西澤 稔

も住いも一番変化した年だったので、所員会等一番疎遠であったと思う。

でも所員のメンバーも変わり、より新しい研究所へと変化するのは当然なことと思うし、老兵はそろそろ身を引く頃かなと思っている昨今です。去年だれかの云ったセリフを借りると岩井先生→○人、早坂先生→○人、佐藤先生→麗人

この“レイ人”というのは某社の広辞苑第五版で確認したけれど“心の綺麗な人”と、小生は受け止めました。

追伸、佐藤先生からいただきました津軽塗の箸をウチのカミさんが毎日愛用していますよ。いろいろとソフトな思考形態を教わった“人”として終生心に秘めておこうと思っています。どうもありがとうございます。

再会を望み、ご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

所員 福山 清蔵

いだけれど内面は相当にホットでした。

忙しい忙しい生活が少し整理されて、臨床のことばを豊かにしていられることを切に願っています。

日米を往復すると聞きました。身体をいたわりながらの活躍を祈ります。

10年を振り返って

佐藤悦子

この「社会福祉ニュース」は1987年に再刊されましたが、その号で私は自己紹介をしました。こんなことを書いています。

“論理実証主義が主流である社会学部の中で臨床系（臨床社会心理学）の教員として仕事をしています。研究上では、個の経験の一回性、ユニークさを如何に他者に劈かれたものとして記述・説明するかとの、方法論上の問いが頭を離れません。具体的には、家族関係を対人コミュニケーションの完結、不完結という視点から研究する一方、民間の相談室と医療クリニックで個人や家族のカウンセリングまた集団治療にたずさわっています。忙しさにかまけて、生活人としての側面が犠牲になっているムキがあるので、その点の是正が個人的課題です。”

いま読み返してみても、私の心境に何等変わりはなく、最後のセンテンス“生活人としての側面が犠牲になっているムキがある……”を除いては、自分に課した課題は何かやっつけてこられたし、これからもやっっていくことになると思います。

1988年には早坂泰次郎所長を引き継ぎましたが、新所長としての抱負を、「家族・地域－保健・医療のネットワークをめざして」というタイトルの巻頭言に込めました。当社会福祉研究所をキャンパス・地域コミュニティに開かれた場とするために、全てのレベル（所員同志、対大学、対諸機関対他研究所）での対話を推めたいこと、対話の爲には共同作業（生産活動）が必要だと書いたのです。

いま10年間を振り返ると、意図した方向でかなりの成果をあげることができたと思います。活動の詳細はニュースの内容を読んでいただくとして、ここでは所員・研究員の動向にふれたいと思います。

まず藤本昇先生を喪ったことがあげられるでしょう。大学の藤本研究室が学生のたまり場になっていること、一番楽しいのは学生達とお茶を飲むことだと話しておられたうれしそうな顔が忘れられません。最後に病院でお会いした時も次の論文の章立ての話をしておられました。福祉教育に殉じられたと私は思います。

庄司先生と木下先生をお迎えできたことも忘れられません。お二人には鋭い知性と柔らかい感性で、福祉研の舵取りを援けていただきました。それから、異なる専門分野の専任教員の方々に学内所員として参画していただき、志を同じくすることの力強さと喜びを改めて認識いたしました。更に、新しい血液として多くの新研究員が参加され、研究所が一層賑やかになりました。若い力のおかげで活気のある研究会が営まれています。

子供、高齢者、女性、外国人を含む周辺者（いわゆる市場経済戦線での貢献度において周辺的な位置におかれた人々）のWell beingへの配慮の欠如が、全ての日本人を脅やかすところまで来ている現在、福祉・保健・医療の三者連合の実践にしか希望は見出されないと思います。このようなネットワークの拠点として、立教大学社会福祉研究所の役割は益々重要になるでしょう。今後一所員として活動に参加することを楽しみにしています。

佐藤所長在任中の社会福祉研究所の主な活動

◆公開セミナー

- 研究活動の還元と交流を目的に、オープン・プログラムとして各種の公開セミナーを実施
 - * 『対人コミュニケーションに関する体験学習』
 - * 『家族の生態学』
 - * 『家族援助技術セミナー』（夏期）
 - * 『対人援助技術セミナー』（冬期）

◆公開講座

- 学内学生・教職員・一般参加者を対象とした連続公開講座『社会福祉のフロンティア』を年2回主催
1992年度より現在まで17回開催

◆研修プログラム

- 主に専門家を対象とした、家族療法に関する1年間の研修プログラムを佐藤所長を講師として実施
 - * 生態的システム論に基づく家族的アプローチの理論と実際を学ぶ
『家族療法入門セミナー』
 - * 事例を学ぶ
『家族療法事例セミナー』

◆家族福祉に関わる研究活動

- プロジェクト形式により、各種の調査研究や臨床研究を実施
 - * 家庭児童相談研究会を発足させ、家庭児童相談室の実態調査をおこなう

◆相談援助活動

- 研究所内の家族福祉相談室で、家族心理相談・福祉相談を実施

立教大学社会福祉ニュース 第20号 目次

- 惜別…佐藤悦子所長の退任にあたって…………… 1
- 1998年度の社会福祉研究所の活動…………… 2
- 佐藤悦子先生を送る言葉…………… 3～5
- 10年を振り返って…………… 6
- 佐藤所長在任中の社会福祉研究所の主な活動…………… 7
- 研究所スタッフ一覧…………… 8

＜研究所スタッフ一覧＞

(1999年3月現在)

所 長	佐藤 悦子	立教大学社会学部教授	田宮 崇	長岡西病院院長
副所長	庄司 洋子	立教大学社会学部教授	西澤 稔	元山口県立大学社会福祉学部教授
所 員	足立 勲	淑徳大学社会学部教授	長谷川 浩	東海大学健康科学部教授
	安達 映子	共栄学園短期大学社会福祉学科専任講師	早坂泰次郎	日本IPR研究会代表、立教大学名誉教授
	荒木 伸怡	立教大学法学部教授	原 史子	上田女子短期大学幼児教育科専任講師
	岩佐 壽夫	家庭ケースワーク研究所長	平木 典子	日本女子大学人間社会学部教授
	岩本 操	北里大学東病院総合相談部ソーシャルワーカー	福山 清蔵	立教大学コミュニティ福祉学部教授
	江口 篤寿	筑波大学名誉教授	柳澤 孝主	佐野国際情報短期大学専任講師
	岡田玲一郎	社会医療研究所長	山本 祐策	神戸国際大学経済学部教授
	小川 憲治	長野大学産業社会学部教授	山本 恵一	東京国際大学人間社会学部助教授
	小滝美智子	竹中工務店カウンセリングルームカウンセラー	湯澤 直美	立教大学コミュニティ福祉学部専任講師
	梶原 達観	精神医学ソーシャルワーク研究所長		
	菊野 一雄	立教大学経済学部教授		
	木下 康仁	立教大学社会学部教授		
	小松理佐子	中部学院大学人間福祉学部専任講師		
	坂口 順治	平安女学院理事長		研究員他 23名
	櫻井 芳郎	淑徳短期大学社会福祉学科教授		
	塩野谷 斉	山口短期大学児童教育科専任講師		
	柴崎 正行	東京家政大学家政学部助教授		
	高橋 紘士	立教大学コミュニティ福祉学部教授		
	高橋 良臣	登校拒否文化医学研究所代表		
	田中 一彦	淑徳大学社会学部教授		
	田中ひな子	原宿カウンセリングセンター臨床心理士		

編集後記

第20号の社会福祉ニュースは、この3月をもって退任となる佐藤悦子所長に、感謝の思いを込めて記念特集号を企画しました。紙面の都合上、多くの方の声をお載せできなかったことをお詫び致します。また今回より、湯澤・井上・潮谷が編集委員となり、ニュースの発行を行っていくことになりました。何卒よろしくお願い致します。